

Title	ナレッジ時代におけるミドルの役割 - 知識創造を導くミドルと組織地図 -
Sub Title	
Author	岡嶋, 徹(Okajima, Tooru) 奥村, 昭博
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2004
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2004年度経営学 第1937号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002004-1937">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002004-1937</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 論文要旨

所属ゼミ	奥村 研究会	学籍番号	80328188	氏名	岡嶋 徹
(論文題名)					
ナレッジ時代におけるミドルの役割 ー知識創造を導くミドルと組織地図ー					
(内容の要旨)					
<p>1980年代から1990年初頭にかけて、アルビン・トフラーやピーター・ドラッカーをはじめとする、名だたる学者やコンサルタントたちが「これからは、知（ナレッジ）の時代」だと断言し、以来「知識こそ企業にとって最大の価値創造の源泉である」というものの見方は、世界的に注目されているといっても過言ではない。そして、知識社会の到来が予言されて久しく、我々はすでにその社会に現実として生きている。</p> <p>スタンフォード大学の経済学者ポール・ローマーは「知識は使うほどに増大する資産、無尽蔵の資産だ」と論じた。しかし、それはアクセスできたときのみ価値ある企業資産となり、アクセスの程度に応じて、その価値は増大するのである。組織が大きくなると、必要とする知識が社内が存在するチャンスは増えるが、知識がどこかにあるというだけでは、決して役立たない。</p> <p>確かに組織には知識が豊富にある。だが、あるからと言ってそれを使えるとは限らないのだ。</p> <p>本研究では、野中らの『知識創造理論』を基礎としながらも、その理論で欠けている組織内におけるヨコの知識融合について、ミドルがいかにして実現しているかに焦点をあて、「組織地図」という考え方をを用いて解明する。</p> <p>事例としては、継続的な組織的知識創造を実践し、常に高い競争力をもつ企業を取り上げ、その従業員に対して、大規模なアンケート調査を実施し、調査から判明した視点も交えて考察を加えていく。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>					